

第2回指宿枕崎線(指宿・枕崎間)の将来のあり方に関する検討会議

議事概要

日時：令和7年2月10日（月）14:00-16:00

場所 鹿児島県社会福祉センター 7階第2会議室

指宿枕崎線指宿駅から枕崎駅までの区間における将来のあり方を検討する「指宿枕崎線（指宿・枕崎間）の将来のあり方に関する検討会議」について、第2回検討会議を開催したところであり、その議事概要は以下のとおり。

1. 開会
2. 冒頭挨拶 【鹿児島県総合政策部交通政策課長】
3. 報告

○ 第1回ワークショップの振り返りについて

- ・事務局より、10月にそれぞれ開催した商工等関係者及び沿線地域の高校生とのワークショップについて概要を説明。

（指宿市）

- ・番所鼻や立神岩、石垣駅界隈の賑わいなど、ポテンシャルのある場所や我々にはない発想・意見が豊富にあったところ。
- ・先月、指宿市でシンポジウムを開催したが、中原水産の社長の講演の中で、指宿枕崎線には鉄道ファン垂涎の列車が運行しているという話など、指宿枕崎線に関心の高いものが散見された。
- ・一方、便数が少ないなどの改善点を指摘する声もあったが、運行の際に非常に揺れるという点を強みに捉えていた意見に好感が持てた。

（南九州市）

- ・沿線の昔懐かしい雰囲気や景色など、ワークショップを通して改めて注目していただいたと思う。
- ・今後はノスタルジーの雰囲気など抽象的なものをいかに地域外に発信していくか、地域の方々に対してどのように興味をもってもらうかが重要になってくると思う。

(枕崎市)

- ・ワークショップを通して、指宿枕崎線の沿線の可能性について深く議論し、地域の魅力を再発見する機会になったと思っている。
- ・人の優しさや景色の美しさ、食べ物の美味しさなどの魅力を再認識し、地域活性化への意識が醸成されたと思う。
- ・ワークショップをさらに多くの世代の方々を巻き込みながら続けることができれば、指宿枕崎線に対する意識の醸成が図られていると思うっており、その手法や方策を含めて考えていかなければならないと思う。

(九州旅客鉄道株式会社)

- ・指宿枕崎線と沿線の将来について、地域の方々が指宿枕崎線の沿線地域をどのように考えているのかを知る機会となり、我々としても非常にありがたく、良い機会だった。
- ・ワークショップの御意見の中には列車の乗り心地の問題や、駅や車両の清掃状況に関する意見もあり、事業者としてしっかりと真摯に受け止めていく。
- ・鉄道の利用者を増やしていくこともさることながら、鉄道という存在を地域としてどう活かしていくか、それが地域にもたらす効果をどう最大化していくのか、ということが非常に重要であると認識しており、今後そのような視点で施策を検討する必要があると思っている。

(鹿児島県 南薩地域振興局)

- ・魅力的な御意見をたくさん頂き、実現できるようなアイデアは、地域振興推進事業で取り組みたいと思う。

(神田教授)

- ・指宿枕崎線の話は、根幹としてまちづくりの問題と課題を認識している。
- ・地域の魅力があるという話の一方で、交通手段としては鉄道のニーズが少ないといった、地方の現状として仕方の無い意見も出た。このような条件の中で、どうやって鉄道を活かしていくか、というのが今後のポイントだと考えている。
- ・地方鉄道を巡る議論は、鉄道大量輸送特性や数億円の営業損益など、採算性についてよく議論されている。そうではなく、鉄道という手段を使って地域を元気にする、という発想を共通のものとしてしっかり考えていかないといけない。地域に鉄道があることにより過疎化の進行を防げるか、そういった観点からの議論かと思う。

- ・移動量や駅周辺のまちづくりなど交通手段としての魅力を活かす議論と同時に、鉄道をきっかけとして地域にお金を呼び込む方法の議論をしていかなければならない。
- ・鉄道の議論をきっかけに、今後のまちのあり方をポジティブに考える機会にしたい。ワークショップに参加された方が、我が事として捉え、主体性を持って「自分には何ができるか」と考えるよう、マイまち意識の醸成が必要。
- ・地域の経済活性化に鉄道が必要であり、結果として生活交通も確保できる、という発想が必要になってくると思う。ワークショップでは前向きに考えてくれる方が多くいたので、諦めない地域づくりをしていくなかで鉄道を考えていく視点というのが必要だと思った。

(鹿児島県 交通政策課)

- ・ワークショップにて、鉄道を我が事として参加者の方々に考えていただいたのは、非常に良かったと思う。地域と対話の機会をつくりながら、地域づくり・公共交通づくりをしていく必要があると、委員の皆様から話を頂いた。ここでの意見を今後の我々の行動に反映し、議論ができればと思う。

4. 議事

○ 第1号 鉄道を活かした地域づくりについて

九州旅客鉄道株式会社から、資料1に沿って説明

- ・地域の素材と鉄道がうまくコラボレーションすることによって、地域に効果をもたらすと考えている。
- ・例えば、沿線の高校や商業施設には、鉄道が移動手段としての足という効果があり、観光名所や食については、鉄道と掛け合わせることで旅行者の増加や海外からのインバウンドの増加といった効果が期待できるものと考えている。鉄道が走っている姿や、鉄道の駅舎とともに織りなす風景などの魅力を活かすことで、地域に住みたいといった移住者が増加し、ひいては駅周辺の賑わいに繋がるといった可能性もあるのではないか。
- ・今回、このような鉄道と地域の結びつきを皆様で議論していただき、鉄道の価値という部分を改めて考えていきたい。
- ・また、鉄道の価値を漠然とした形ではなく、定量的に評価していくことが非常に重要だと考えている。

- ・観光客の消費等を定量化し、地域の素材と鉄道を掛け合わせた施策を実現することによってどれだけ効果を増大させていくことができるのか、または新たな効果という形で創出できるのか、というものを考えていく必要があると思っている。
- ・今後検討する各種施策が地域経済に対しどの程度のインパクトがあるのか、どのような指標を用いるか、またそれをどうやって算出するかなど、今後しっかりと検討していかなければならないと考えている。

（鹿児島県 交通政策課）

- ・鉄道がもたらす効果を考える際には「今ある効果」と「今後伸ばしていく必要がある効果」というのは切り分けて考えなければいけないと思っている。
- ・例えば、「今ある価値」として日常の移動手段としての足があると思うが、これはどこまで最大化できるのか、という観点になると思う。地価上昇や定住人口の増加は、駅周辺の開発が進んだ後の話であり、目に見えてすぐに増加するわけではない。
- ・既にあるものを最大化する、あるいは将来的に伸ばさないといけない価値を含めて認識・整理をしなければならないと思う。

（指宿市）

- ・象徴的な存在というのが独自であり伸びしろがあると思う。
- ・ワークショップの意見でも昭和 50 年代のディーゼルカーのボックス席や扇風機は、マニアからすれば垂涎のものといった意見があった。
- ・鉄道は過去・歴史、幼少から青春時代などをタイムスリップできる空間でもあると思う。そこにいた人以外でも共有できる空間があるのではと思う。田舎の原風景を走る中で、ノスタルジーといった、象徴的存在というのが非常に強いと思う。

（南九州市）

- ・駅も象徴的な存在だと思う。集客力を高めるにあたっては駅自体が目的地になり得るのではないかと考える。
- ・既に駅を拠点として活動している地域の団体があり、賑わいづくりの場となっている。これにより、地域のコミュニティの評価や関心のある人の増加など、地域にもたらされる効果が広がっていると思っている。
- ・地方で病院に人が集まるといった話があるが、これを駅に変えることができないかとイメージしている。

(枕崎市)

- ・ 鉄道には地域の愛着と誇り、というのがあって考えている。
- ・ 車窓から見える美しい海岸線や田園風景は観光客にとって大きな魅力であり、守り継いでいこうといった機運の醸成に繋がっているのではないかと感じる。
- ・ また、枕崎市の特産品であるかつお節や焼酎を全国各地へ流通させ、ブランド価値形成に大きく寄与した経済産業の支えとなった歴史的な価値もあると思う。
- ・ 枕崎駅には訪れた人々の感想や体験を記した思い出のノートがあるが、これに地域の魅力や最高の魅力、特別な体験などを窺える内容になっていることから、幸福度の向上ということも考えた。

(九州旅客鉄道株式会社)

- ・ 移動手段としての価値というのが、運輸収入として当方の直接的な収入となっているが、ローカル線の将来のあり方を考える上では、通学の足などを爆発的に伸ばすというのは、過疎化や少子化を考えると指宿枕崎線の地域に限らず難しい。
- ・ 象徴的な存在や乗ることそのものに対する効果の磨き上げ、地域づくりというのが、鉄道の必要性を高めていくと思った。先ほど御意見にもあったが、この地域特有の素材がやはり非常にある。それらを上手く掛け合わせた施策が実行できれば鉄道を活かした地域づくりの先が明るく見えてくるのではないかと感じた。
- ・ 神田教授がおっしゃったように、鉄道という一つのコンテンツを活かして、地域でいかに稼ぐか、その結果移動手段としての足も確保されることになるという切り口になると思った。

(神田教授)

- ・ 地図上で指宿枕崎線を初めて見た時、鉄道は迂回しているが道路はまっすぐに整備されていことから、横方向に移動する鉄道部分はかなり厳しいといった第一印象だった。
- ・ しかし現地を見た後、地域にオンリーワン、ナンバーワンといった要素が多くあり、可能性があるという印象が変わった。何故こんなに移住者がいるのか、何故これを生業としてやっているのかビジネス目線で聞きたいと思った。
- ・ 既存の観光ではなく、都会から産業目線で人を呼び込む産業観光をイメ

一ジした。産業というのは一つのキーだと思う。従来型の産業もだが、産業を担っている方々の物語、あるいは、横のつながりみたいなものを上手く結びつけていくと、新たな産業が起こる可能性すらあるというのが、私自身がこの3市を訪れて持った印象。

- ・また、お金と人を循環させたいと思う。持っている物の見せ方、打ち込み方、売り方次第でいろんなものがあるのではないかなと思う。

(鹿児島県 交通政策課)

- ・顚娃おこそ会や、指宿でのシンポジウム、南薩地域振興局でのプロジェクトなど各地域での取り組みがそれぞれあったかと思う。今回の議論において関連するものもあると思うので、話題提供いただきたい。

(南九州市)

- ・地域で活動している顚娃おこそ会は、西顚娃駅の管理業務委託を通年で取り組まれている。直近の話題だと、「まちなかミーティング」という市長と対談する機会があった。
- ・その際の大きな話題が二つあり、一つが西顚娃駅を拠点・軸とした賑わいづくり。内容としては、JR九州の取り組みの一つである「ドリームステーション」を目指して、物販や宿泊、飲食する場などを整備することで賑わいを生み出していけるよう動いているとのことだった。
- ・もう一つの話題が景観作りについて。駅や沿線を松ヶ浦駅のような誇らしい場になるよう連携して取り組んでいきたいと再認識した。
- ・指宿枕崎線の将来のあり方に関する検討会議が発足した中だからこそ、地域の良さを見つめ直して、活かしていこうという話しになったところだった。

(鹿児島県 南薩地域振興局)

- ・R6年11月に、JR指宿枕崎線まちづくりプロジェクトでお仕事体験イベントを実施した。枕崎市の小学生が指宿枕崎線で鹿児島中央駅まで行き、駅の仕事を体験した。
- ・また、地域住民向けのJRを活用したモデルルートを作成している。令和7年度には、このモデルルートを周知するフリーペーパーを沿線市の全戸に配布する予定。
- ・松ヶ浦駅に、かごしま景観大賞受賞記念の看板を設置予定。この看板は、3月に廃校になる松ヶ浦小学校の子どもたちと作成した。新たな撮影スポットになればと思う。

(指宿市)

- ・ 指宿枕崎線輸送強化促進期成会にて 1 月 25 日にシンポジウムを開催した。120 人の方々に来場いただき、県外からも多くご来場いただいた。
- ・ 株式会社 I F O O の代表取締役社長である八幡秀樹氏に、霧島神宮駅を拠点としたまちづくりについて講演していただいた。八幡氏からは、その場所に来てもらうためには目的を創出すること、まちを「新築」せず、建物や風景を活かし役割を継いでいくことを大切にしているとお話があった。
- ・ 先日、線区活用検討会においても、肥前浜駅の取組みを視察したが、駅近くに酒蔵通りがあり、建物は重要伝統的建造物や存在感、歴史的重みを感じた。まさに八幡氏のいう「目的」になりえ、ワークショップでの意見も参考に目的をつくりあげる必要性を感じた。

(鹿児島県 交通政策課)

- ・ 今お話いただいた地域の取り組みや思いを汲んだ上で、産業としての観光など、改めて鉄道の価値・効果を深掘りしていくのが、我々の総意であり、次年度の活動のベースだと思った。

○ 第 2 号 今後の進め方及び取組について

事務局から、資料 2 に沿って説明。

(鹿児島県 交通政策課)

- ・ 第 1 回のワークショップを経て、今後の高校生のワークショップの内容は商工等関係者と同じやり方だと、少し厳しいと思った。高校生は生業を持っているわけではなく、自分でできることは限られている。実施する事業に巻き込んでいくなど、ワークショップのやり方には工夫が必要だと思った。

(神田教授)

- ・ 1 週間や 1 か月など、ある程度時期を決めて、キャンペーン期間として様々な挑戦を働きかけるやり方もあると思う。地域の意識醸成には時間を要するので、実施の時期は検討しないといけない。

(鹿児島県 交通政策課)

- ・それぞれの地域でイベント等があると思うので、うまく組み合わせるのもあると思う。

(指宿市)

- ・地域が稼ぎ出すにあたっては現状把握が必要と考える。
- ・そのためのマーケティング調査は有効だと考えており、指宿市ではH27に観光特急「指宿のたまて箱」を含めた観光に関するアンケート調査をしている。
- ・乗客の宿泊地や一次交通・二次交通の移動手段など、観光列車に付随する経済波及効果が地域にもたらされることが調査でわかった。
- ・このような既存の調査データも活用・深掘するなどし、取り組むべき実証事業や方策を見出すことができればと考えている。

(南九州市)

- ・当市には顕娃おこそ会という団体があり、地域側からも行動を起こしていただく仕組みとしてできれば良いと思っている。
- ・行政側から課題を共有するのはもちろん、地域の声や思いを可視化する支援というのが必要と思っている。
- ・ワークショップでの様々な意見は重要なキーワードだと思っており、その場で終わらせるのではなく、形にできるものはしていかなければならないと思っている。

(枕崎市)

- ・全国ローカル鉄道サミットについて、枕崎の方で手を挙げているところ

(神田教授)

- ・鉄道の価値とは何か、どのように活かして地域を繋げるのか、ということ、しつこい程地域とコミュニケーションを取った上でやらないと、単発イベントのようになってしまうので注意が必要。

(九州旅客鉄道株式会社)

- ・地域では顕娃おこそ会といった、熱い思いをお持ちの方々もたくさんいらっしゃると思う。そういった方々と、関わり合って一緒の方向を見て取り組んでいくことが重要かと思う。
- ・人をどうやって掘り起こしていくか。1回目のような大きな規模のワー

クシoppだと開催が大変だと思うので、軽いコミュニティとして回数を増やし、地域の方々と接する機会を増やすことで、地域づくりの中心となって活躍していただける方を創出することができるのではないかなと思う。

- ・全国に目を向けると先行的に地域づくりに取り組んでいるお手本になるような場所もあると思う。先行地視察といった、勉強会のようなものを実施し、より具体的なイメージが高まる様な取組を実施するのが良いと思う。
- ・定量評価について、最終目標としてここを目指していけば経済的価値が高まるというのがわかっていると、具体的な自分たちの施策がイメージしやすいと思う。コンサルを活用するという案もあるが、自分たちの取り組みを計る物差しとして、やはり定量評価をどのようにやっていくかを早めに整理すべきかなと思う。

(九州運輸局)

- ・地域で考えるにあたって、地域が考えた取り組みを実証事業含めて一緒にイメージしていくことが大事かなと思う。
- ・ワークショップ等でアイデアを言って終わりではなく、実現するところまで地域の皆さんと考えるというプロセスを踏むことが、より重要。

(鹿児島県 交通政策課)

- ・本日の議論を総括すると、今回、ワークショップの振り返りや各自治体での動きを共有し、鉄道が地域にもたらす効果、鉄道の価値について関係者間で議論・共有した。
- ・来年度の進め方については、ワークショップを継続し、その内容や手法は別途検討、経済的価値を可視化するための調査や、鉄道の経済的価値を高めるための実証事業を実施、担い手や伴走者の創出を検討することとして、関係者間で整理できたかなと考えるかが如何かな。

全ての構成員の賛同

以上